

64号

愛鳥教育

2001.8



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.64
2001.8

目 次

平成12年度講演会報告 都市に適応したカラスと 人間の共存を考える ----- 箕輪多津男 3	南極大陸 ----- 箕輪多津男 24
講演 カラスの社会学 ----- 松田道生 4	お知らせ 我孫子バードフェスティバル ----- 26
もりまき通信(14) 鳥の名のつく草花たち ----- 森 真希 19	書評 『列島渡り撮り』 ----- 箕輪多津男 28
	編集後記 ----- 28

平成12年度講演会報告

都市に適応したカラスと人間の共存を考える

事務局 箕輪 多津男

去る平成13年2月9日(金)、東京都生涯学習センター・セミナー室において、今年度で3回目となる講演会を開催いたしました。講師にはおなじみの松田道生氏を迎え、当日は25名ほどの参加を得て、なごやかな中にも熱気のある会合となりました。

スケジュールに従い、染谷優児副会長による開会あいさつと島田利子副会長による全国愛鳥教育研究会の活動紹介ののち、松田氏の講演に移りました。

内容の詳細につきましては、本誌に掲載されております、ご自身の『カラスの社会学』をお読みいただくとお分かりいただけると思いますが、東京都心において高密度で繁殖を続けるハシブトガラスを中心に、その生態や行動、彼らと人間社会との関係性について、社会学的なアプローチを展開するというもので、自らの調査データ等も披露していただきながら、大変分かりやすく語っていただきました。

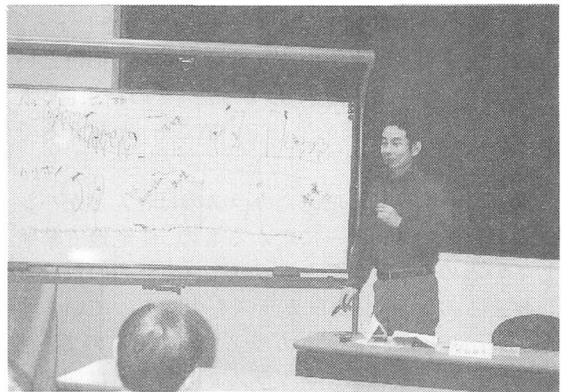
ご存じの通り、近年、松田氏はカラスの研究に特に力を入れておられ、各地でのカラスに関する講演や発表、あるいはテレビやラジオ番組への出演などを精力的に展開され、今や各地で引っ張りだこの存在となっています。最近の著書『カラス、なぜ襲う』(河出書房新社)においても、様々な具体的事例やデータを盛り込みながら、カラスの興味深い生態に鋭く迫っておられます。同書につきましては、当日もご紹介させていただきましたが、ここで改めて読者の方々にも是非ご一読をお薦めしたいと思います。

ハシブトガラスあるいはハシボソガラスの行動や生態に関する研究は、進めば進むほど奥の深いものようで、今後も興味の尽きないテーマとなっていくことでしょう。と同時に、都市に適応したハシブトガラスを中心とする個体群の今後の動向と、同じ環境に生活を営んでいる私たち人間との「共存」のあり方について、あらゆる知恵を絞って模索していくことが、大きな課題となって私たちの目の前に現れてきたということになります。ゴミ問題や食料問題も含め、都心や住宅地の環境について、カラスの

生息実態に照らしながら見つめ直すことも必要でしょう。そうした点で、まさに社会学的な視点による総合的な検討を展開していくことが、今後ますます重要になっていくものと思われます。今回の講演内容は、そのための大きな示唆を与えてくれたものと改めて感じた次第です。

人間とカラスのより良い未来像は、いったいどのようなものなのか、これからも皆さんとともに考えていければと思います。

終わりに、今回の講演会の開催にあたり、ご参加およびご支援いただきました多くの方々に、改めて感謝の意を表します。



講演

カラスの社会学

全国愛鳥教育研究会顧問 松田道生

カラス問題の問題

このところ、カラスが元気です。

私は、中学生のときに野鳥に興味を持って以来35年、鳥と関わってきました。しかし、私がカラスに意識して関わったのは、カラスのシンポジウムをお手伝いした、わずかこの3年間にすぎません。それなのに、マスコミの取材をたびたび受けるようになり、カラスに関する本まで書いてしまいました。

カラスの問題を考えたとき、カラスについては調べている人が少なく多くのことがわかっていないことが、まず問題です。私のような者でさえカラスの専門家になってしまうことが、そもそも問題であるわけです。

さて、カラス問題とはそもそも何なのでしょう。一口で言えば「東京を中心とする首都圏、都市という環境でカラスが増えてしまった。その結果、ヒトとのいろいろな軋轢を生じていること」と言えるでしょう。

東京の都心で見る増えたカラスのほとんどがハシブトガラスです。ごみにたかるもの、住宅地で繁殖しているのも、ハシブトガラスです。都心のねぐらに集まるのは、ハシボソガラスも少数入っていますが、ほとんどがハシブトガラスです。ですので、都市で増えたのはハシブトガラスであることは間違いありません。

もちろん、東京周辺、たとえば埼玉県川口市や千葉県松戸市のねぐらにはハシボソガラスの割合が多くなりますし、北海道札幌市内のねぐらはハシボソガラスが中心とのことです。一概にハシボソガラスを除外して考えるわけにはいきません。しかし、現在東京などの都市において軋轢を生じているのはハシブトガラスが多くを占めていると言ってよいでしょう。

カラスは皆黒くて、大きく、同じに見えます。バードウォッチングの初心者にとって、ハシブトガラスとハシボソガラスの区別は苦勞するものの一つです。しかし、この2種類のカラスは生活の仕方が大きく違い、そのためヒトとの軋轢も異なり、問題も変わってくるのです。

簡単にいうと、ハシブトガラスは森林を好み、ハシボソガラスは開けた環境である草原を好むという傾向があります。ハシブトガラスは、森の奥の樹木で繁殖し、木の実を食べます。ハシボソガラスは林縁部の樹木に巣を作り、草の実などを歩きながらついでに食べる傾向があります。

ハシボソガラスのヒトとの軋轢は、たとえば、畑に蒔いた種をついばみ、農耕地の真ん中にある送電鉄塔に巣を作るといったことです。草原という環境でもあるゴルフ場で、ゴルフボールを持っていってしまうというのも多くはハシボソガラスです。そのため、ハシボソガラスの問題は、主に農耕地で発生し、郊外から地方で起こっています。

いっぽう、ハシブトガラスは、都市環境の中の樹木や電柱、広告塔などで繁殖し、電柱にとまって下にあるごみにねらいをつけて食べます。ねぐらも都心やその周辺の緑地です。ハシブトガラスは、都市環境の中の森林的な要素をたくみに利用して、生活していると言えるでしょう。ですから、ハシブトガラスとヒトとの軋轢は、都市生活者との問題となります。

ここで種類を見誤ると、対策を立てて実施してもおかしなことになります。たとえば、神奈川県のある自治体で農業被害のためカラスを駆除しているというので視察に行ったことがあります。カラス駆除の目的は、トウモロコシの種を蒔くと食べてしまうので、予防的処置として捕獲するというものです。この場合、駆除の対象はハシボソガラスでなくてはなりません。

視察に行ってみると、雑木林と畑のあいだに大きな鳥小屋のような「箱わな」が置いてありました。10数羽のカラスが捕らえられています。見るとすべてハシブトガラスでした。もう1ヶ所のわなの中もハシブトガラスばかり。それも、口の中が見えるものは、皆肉色が残っている若鳥ばかりです。

わなの置いてあるそばの畑にはカラスの足跡がえんえんといっています。このように歩くのはハシボソガラスですから、ハシボソガラスもいるし被害もあることでしょう。しかし、雑木林に隣接してある

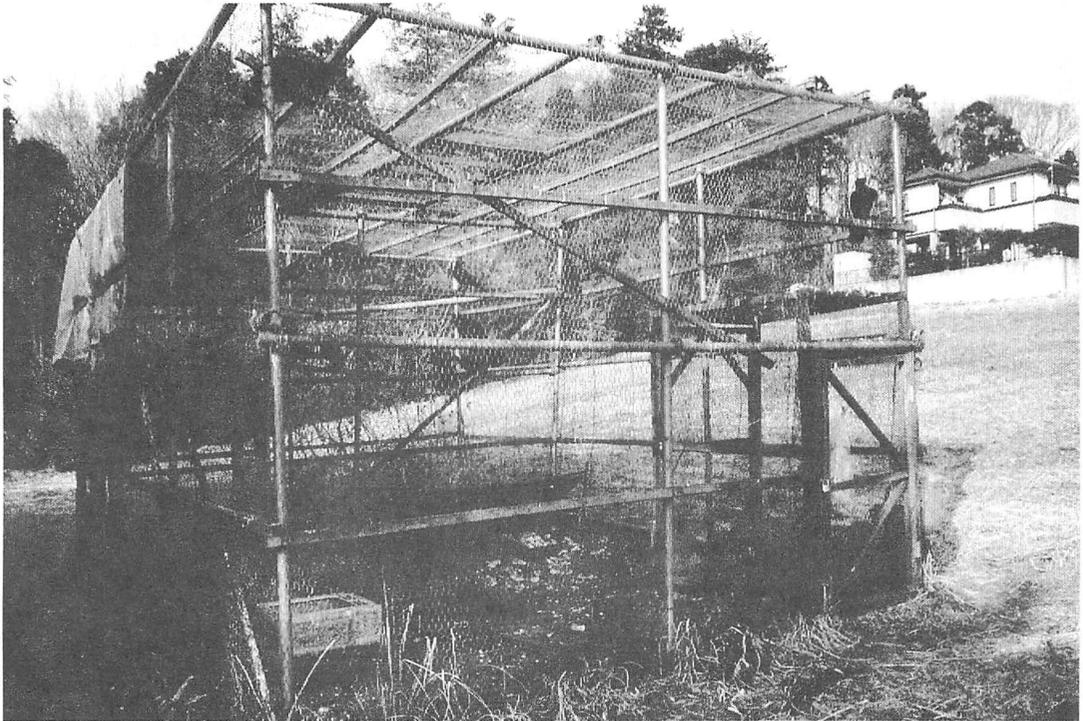
ために、木にとまって食べ物に取り付く習性のあるハシブトガラスがわなに入ってしまうのです。

ハシブトガラスもまったく農作物を食べないわけではありませんが、主犯はハシボソガラスでしょう。ハシブトガラスにとっては冤罪ですし、このわなの設置はトウモロコシの種を食べてしまうカラスを駆除して問題を解決することには、あまりなっていないわけです。

また、マスコミの取り上げ方の典型的な例ですが、クルマを自動車に轢かせて割って食べる仙台市のハシボソガラスや、線路に置き石をした横須賀市のハシボソガラスの映像が出て、次に銀座や渋谷の

ごみをあさるハシブトガラスやヒトを威嚇するハシブトガラスが登場する。そして、このように頭の良いカラスが都会で増え、ヒトを襲うようになりましたとコメントが続きます。こちらでは、ハシボソガラスが冤罪だと言いたいところでしょう。

地球では、森の中をたくみに移動し力の強いサルが都会で爆発的に増えていますと言ったら、オランウータンは怒ることでしょう。種類が違うということは、習性が違い生活の仕方が違うわけですから、おのずから問題も違うことになります。まず、種類をしっかりと確認していないことが、カラス問題の問題です。



箱わな

カラスは増えたか

次に、東京のハシブトガラスは本当に増えたのでしょうか。増えたという根拠は、いくつかあります。たとえば、私が1984年以来、調査をしている文京区六義園では確実な増加を確認しています。幸いなことに、六義園では1960年代に江原秀典氏が調査をし、このときは一桁、それも1、2羽でした。1970年代は川内博氏が調査を行い、多いときで10羽代で二桁となりました。私が調査を始めたころは、10羽台が多く、1990年代に入り100羽の時も

あり三桁となりました。同時に、ねぐらも形成されました。これらについては、特定の緑地の記録であり、東京全体の傾向を示しているのかといった疑問がありますが、定点で長期にわたる記録のある場所が、実はこれ以外にないのです。

そもそも、私がカラス問題に関わるようになったのも、このオリジナルの記録を持っていたからです。調査そのものは、カラスに限定されたものではありません。都市の緑地における野鳥の生息状況を把握できたらということで記録を録り続けただけで

す。それが東京のカラスの増加を記録することになるとは思ってもみませんでした。

これ以外には都市鳥研究会が5年に一度、明治神宮などのねぐらに入るカラスの数を数えています。この調査でも、ほぼ六義園の記録と同じような増加の傾向が報告されていますので、東京のハシブトガラスが増えたこと、さらに1990年代に急増したことは、間違いないと思われます。

ねぐらに集まるカラスを数えることで、冬の東京のカラスの数を把握することができますが、繁殖しているものの個体数は誰も記録していません。

私は、2000年に駒込周辺のアシトガラスの繁殖状況を調べました。また、隣接する千石地区を星維子さんが調べてくれました。この地区の中に入る六義園をのぞく約180haの中に30個の巣があることがわかりました。近い巣では50mも離れていません。住宅地では100～200mに1個の巣があるといっているほどの密度で繁殖していたのです。都心の住宅地における繁殖状況の調査はこれ以外にないので、この報告が都心全体に当てはまるのかどうかまだわかりません。しかし、かなりの密度で繁殖していることは、間違いないでしょう。

では現在、何羽のアシトガラスがいるのでしょうか。これがわからないことが大きな問題のひとつです。カラスの数は、ねぐらを見つけ、ねぐらに入る数を数えれば把握することができます。ただし、これは前述のように、冬の生息数であること、そして同じねぐらには同じカラスが戻ってきているという前提があります。

というのは、ねぐら入りの数を数えるのには、調査員は少なくとも10人程度、広いところでは20人は必要です。都市鳥研究会が行っているのはボランティアを募っての調査です。都内のねぐらと同じ日に同時に数えるということができないからです。

また、現在、小さなねぐらが、あちこちにできていることがわかりました。私が見ただけでも、文京区小石川植物園、板橋区城北公園などがあり、100～200羽程度がねぐらにしています。このような緑地はたくさんありますから、もし記録が漏れていれば10ヶ所で1000～2000羽の狂いが生じることになります。

次に、東京のカラスといったときにどこまで含めるかが問題です。山手線周辺、23区内、東京都内などのくり方が思い浮かびますが、カラスは行政区画どおりに戸籍があるわけではなく自由に翼を持って

飛び回っています。そうすると、埼玉県、千葉県、神奈川県との隣接地域の状況の把握も必要です。

日本野鳥の会東京支部の川内博さんが、2000～2001年の冬の季節のねぐら入りカラスの状況を、東京駅を中心に50km圏内ということで、記録を収集しました。まだ多くの漏れがあるとのことですが、ざっと8万羽、漏れを加味すれば10万羽という推定も成り立つものとなりました。

このようなカラスの実状を把握する調査の多くが、ボランティアに頼っていることが、これまた問題なのです。とくに、個体数の把握は重要です。この実態をもとに対策を立てて施策し、その効果を判定しなくてはなりません。そのときに、出発点の数字が違ってはなりません。

あとで述べますが、東京都がカラス対策事業を実施するにあたり、当初掲げていた27,000羽という数字は5年前のもので、それも、他の機関が調査した数字を掲げての事業の実施です。そもそも出発点の数字が違っている事業、今後の展開が不安になります。

カラスは、なぜ増えたのか

東京周辺でアシトガラスが増えたことは間違いありません。おおよそ8～10万羽がいると推定できる情報は把握できました。では、なぜこのように増えたのでしょうか。

増えた原因は、ごみだと言われています。

では、ほんとうに東京のアシトガラスはごみを食べているのでしょうか。生き物の食性を調べるのは、捕まえてお腹を裂けば簡単です。しかし、東京のアシトガラスを捕まえる方法は、銃猟ができませんので、わなということになります。一般的な箱わなでは、捕まるのは若鳥ばかりです。それも、お腹をすかせて餌につられてわなに入ってしまうのですから、こうして捕らえられるカラスのお腹の中は空っぽです。

それに、飛び回っているお腹いっぱい元気な成鳥を仮に捕らえることができ、お腹を裂くことができたとしても、ごみように形のしっかりしていないものの同定は難しいことでしょう。このように、「カラス増加の原因、イコールごみ説」を直接的に証明することはできません。

日本野鳥の会研究センターの黒沢令子さんは、カラスの生息数とごみの出し方、地域について、ボランティア127人を動員して調査を行い分析しまし



ごみをねらうカラス

た。この結果、山手線周辺から郊外の私鉄沿線にかけてカラスが多いことがわかりました。多くはハシブトガラスです。これについては、駅前に発達した商店街のごみが、カラスを集め、カラスを増やしていると結論づけています。

商店街にごみが多いのは、飲食店があることによります。そして、その飲食店は前夜からごみを出しているケースが多く、早起きのカラスに朝食を提供していることとなります。

たしかに、ごみとカラスの量は、右肩あがりが増えていきます。しかし、ごみはバブルがはじけるとともに減少し、現在ではピーク時の70%くらいにま

で減少しています。しかし、カラスは減りません。これは、ごみの出し方に問題がありました。バブルがはじけた1990年に入って、東京都は分別の確認をするために黒いビニール袋から半透明のビニール袋を使うように広報しました。本当は、ポリバケツなどの密閉式の容器によるゴミ出しを奨励しているのですが、袋に「東京都奨励」と書かれているために、あたかも半透明のビニールでゴミ出しをしなくてはならないような広報となり、実際多くのごみが半透明のビニール袋で出されるようになってしまいました。

結果として、視力に頼っている生き物のカラスに

とって、ごみの中から食べられるものを選別して捕ることがたいへん効率的になりました。ごみは減ってもカラスとごみとの接点は変わらない、あるいは増えてしまったのです。カラスにとってのバブルは未だ続いていることになります。

ここでの問題の捉え方は、ごみの量ではなく、ごみとカラスの接点ということになります。資源を無駄使いする大量生産、大量消費の生活を改め、ごみを減らすことはカラス問題以前の課題です。加えて、ごみ出しマナーの悪さをハシブトガラスにつつかかれることになりました。カラス問題を解決するためには、ごみ問題を考えなくてはなりません。したがって、生態学のノウハウとともに社会学も取り入れなくてはならないのです。

ごみの効果

ごみを食べることで、当然、食糧事情のよくなった都会のハシブトガラスは、餓死することがなくなりました。とくに、自然界では食べ物の少ない冬でも食べ物が潤沢にあることから、淘汰されるべき経験の少ない若いカラスが繁殖できる年齢まで生き延びるようになりました。また、老齢なカラスも生き延びて繁殖のチャンスを得ることになります。

カラスの繁殖戦略は、保険の雛がいることです。スズメなどは、卵を産み温め始めるのはすべての卵がそろってからです。そのため、卵から雛が一度にかえり同じ大きさを育ちます。これに対して、カラスは、産んだそばから温め始めます。そのため、卵からかえる雛の大きさはまちまちとなり、差ができます。これは、食べ物が少ない場合は小さな雛は死んでしまいますが、大きな雛だけでも生き残らせようというものです。いわば、後から産み生まれる雛はダメモト、保険なのです。

しかし、雛にあたる食べ物が豊富にあることにより、本来ならば死ぬべき雛も巣立って行き、爆発的な増加を見ることになります。

ごみの効果は、こうした食糧事情の好転による増加ばかりではありません。ごみの山にたかることにより、ヒトに近づき、ヒトを恐れるべき存在ではないと知ってしまったハシブトガラスを増やしてしまった効果があります。こうしてヒトを恐れなくなったハシブトガラスは、よりごみにたかり食料を得ることができ、生き延び、雛を育てます。ちょうど、今繁殖しているものの多くは、バブル期に生まれた雛たちです。いわば、ごみの申し子たちが今、

東京を席卷しているのです。

昔ならば、森の奥を好むハシブトガラスのことでしたから公園の緑地で巣作りをしていたのですが、ヒトを恐れなくなった彼らは、街路樹、庭木、電柱など、ヒトのすぐ近くで巣作りをするようになりました。その結果、雛が大きくなると、巣から落ちたり、次の木に飛び移れない雛が地面に落ちたりといったことが多発し、親はヒトから雛を守ろうと躍起になり、威嚇や攻撃をすることが軋轢を生む結果となるのです。

今、東京のハシブトガラスの問題を考えると、カラスの数について考えるばかりでなく、こうした変わってしまったハシブトガラスの習性、質についても考えなくては問題の解決を導き出すことはできないのです。

ヒトを恐れなくなったもう一つの原因

ごみにたかる以外にも、ヒトを恐れなくなった原因があります。それは、餌付け行為です。かつて日本人の多くは、鳥を見れば捕ろうとするか石を投げました。その結果、日本の野鳥の多くはヒトとの距離をとるようになりました。しかし近年、多くの人が生き物に餌をやるようになりました。公園や駅前のドバト、池のカモ類やコイ。カラスの調査をして町の中を歩いていると駐車場の隅にネコの餌が置いてあるのをよく見つけます。

このような動物への餌の何割かがハシブトガラスの餌にもなり、それが彼等がヒトに近づく結果となります。

さらに、ハシブトガラス専門に餌付けをするヒトも現れてきました。上野公園でのカラスの取材のときに、一人の中年男性が公園に入っていました。すると、周辺のカラスが急に騒がしくなりました。そして、その男性のあとを10数羽のハシブトガラスがついていきます。はじめは警戒されているのかと思いましたが、男性が餌を投げながら歩いていることに気がつきました。

頭のよいカラスのこと、この男性が来る時間を待っていたのかも知れません。そして、迎えてくれて慕うようについてくるカラス、これは餌付けをする者にとっては楽しい対象でしょう。

また、カラスを飼育するヒトもいます。カラスのサイトの掲示板には、カラスを飼いたいけどどうしたら手に入るかなどの質問がきて、サイト管理者が困ってしまったという例がありました。また、カラ



ハトへの給餌がカラスに

スを飼っていたことがあるという体験談や友人知人の飼育体験談を聞くことが多くあります。それらのカラスは、捨てられた幼鳥であることが多く、中には傷ついたものもいます。それで、元気になったので、野生の生き物だから放したという美談になっていることもあります。

しかし、人を見れば餌をもらえることを覚えた餌付けカラスや飼育カラスは、お腹がすいたら人に近づいていきます。それを知らない人は、急に大きくて黒い鳥がやって来たので、びっくりしてカラスに襲われたかと思ってしまうことがあることでしょう。

こうして、東京を中心とする首都圏ではハシブトガラスが増え、ヒトに近づき軋轢が生じているのです。

対カラスの動き

こうしたハシブトガラスの増加と軋轢とを問題視するいろいろな動きがあります。

まず鳥業界の中では、日本野鳥の会東京支部の川内博さんらによるシンポジウムの開催です。1999年に2回、2000年に1回開催されました。これには、発表者として私も参加し、裏方もやりました。第1

回のシンポジウムは、立教大学の教室、定員500人ほどの席が満席となり立ち見が出たほどで、主催者側一同、関心の大きさにびっくりしました。中には、このシンポジウムにあればカラスの被害を防ぐ妙案を教えてもらえると参加した一般の方もいました。ある意味で、一般市民のカラスに対する認識の甘さも知ることができました。

シンポジウムには、いろいろな意味があったと思いますが、私が感じた第一の効用は、カラスを調べている、あるいは興味を持っているヒトのネットワークができるきっかけとなったことでしょう。それまで、私自身、カラスの研究などしているヒトはいないと思っていました。しかし、川内さんは関わりのあるヒトを集め、発表してもらい参加させました。たとえば、日本野鳥の会研究センターの黒沢令子さん、目黒の自然教育園の武藤幹生さん、京都大学の松原始さんらの存在と活動が明らかになりました。そして、これまでバラバラに行われていた研究でしたが、誰がどこで何を研究しているということがわかり、カラスの研究はここまでわかっている、そして何がわからないかということがわかったのです。

鳥業界の対カラス

カラス問題に関わってきて、バードウォッチャーが頼りにならないことがわかりました。日本野鳥の会の会員は、一般市民より無関心ではないかと思うほどです。多少カラスを知り問題を理解しているだけに、臭いものには蓋をしている感じさえします。

バードウォッチングは趣味の世界であり、きれいな鳥、声の美しい鳥との出会いを楽しみ、マニアは珍しい鳥を見ることを信条としています。そういったことでは、黒くてたくさんいるハシブトガラス、ハシボソガラスとも、バードウォッチングでは魅力のない鳥となります。山地で、大きな鳥が飛べば「すわ猛禽か！」と双眼鏡を向けますが、ハシブトガラスであれば「なんだカラスか」でおしまいです。

また、一般の人から、日本野鳥の会会員、あるいはバードウォッチャーだとわかると、「カラスがうるさい」「カラスを何とかして」と言われることに辟易していることもあります。別にバードウォッチャーがカラスを増やしているわけではないのですが、そう言われるのは嫌なもの。その矛先はカラスに向かい、カラスが好きというバードウォッチャーは珍しい存在です。

また、日本野鳥の会研究センターでは、カラスとゴミとの関係などの調査を行いました。このとき、担当者は調査員を集めるのに苦労しました。日本野鳥の会東京支部の会員が5000人を越えているのに調査員のいない区があり、データは空白となりました。また、日本野鳥の会会員、バードウォッチャーを動員しての調査でしたが、カラスがいないと調査をやめてしまう人がいたのには驚きました。カラスがいらないというのは、データとしては必要な記録なのですが、バードウォッチャーは鳥がいなければお仕舞いなのです。

研究者は、どうでしょうか。実は、2000年秋に東京大学で行われた日本鳥学会では、カラス集会の場が設けられました。これは、カラスシンポジウムを開催した川内博さんが中心となり、私が司会進行をいたしました。100人ほどの入れる教室を用意したのですが、集まったのは10数人にすぎませんでした。学会そのものには500人集まり、オオタカやクマタカなどの猛禽類の研究発表の教室は満員、中には立ち見が出るものもありました。

このように、カラスの研究の少なさがカラス問題の解決を遅らせている原因のひとつになっていま

す。日本の鳥類学の多くに共通して言えることですが、さまざまな研究が欧米に比べて遅れています。この原因は、鳥の研究に対して資金を出す所がなく資金が乏しい、単純に言ってお金にならない研究部門であるわけです。同様に、カラスについても研究資金を出す機関は少なく、現在まで研究や調査に費やされた予算は微々たるものです。

鳥類学を志す者の中には、さほど金銭的なことにこだわらずに研究を行い、成果を上げている例が多くあります。しかし、これもバードウォッチャーと同じで、多くは森林性の小鳥や海鳥、あるいはワシタカ類、希少種に人気があり、カラスに取り組む者は多くありません。

こういったことから、カラスに注目し研究している鳥関係者は少なく、データも乏しいのが実状です。

カラス問題は、環境問題でもあるわけですが、自然保護に関わる者の対応はどうでしょうか。これまで鳥は守るもの、保護するものとして声を大にして訴えてきました。その効果が良い面でいろいろ出てくるような時代にはなっています。しかし、ことカラスについては駆除という方法が出てくるので、野鳥の保護に関わってきた者にとっても、できたら避けて通りたいと思っている問題ではあるのです。事実、私はそのために腰がひけていました。

しかし、カラス問題をこのまま放置すれば、カラスを駆除する方向に向かうことが懸念されます。事実、東京都の方策はその方向を向いています。そして、カラスでやったから次はカワウ。そして、かねてから農業との軋轢を生じているマガンヤツル類だって、増えたからということで短絡的に駆除に向かうかもしれません。日本の野生動物を巡る問題は、口では「自然に優しく」「環境を守ろう」と言っても、各論になった場合、すぐに時代が逆行してしまう危うさがあるのです。それだけに自然保護に関わる人間は、カラス問題を監視、チェックしていかなくてはならないと思うのですが、動きが鈍いとの感じが否めません。

また、1960～1970年代の公害問題、環境問題は、敵がはっきりしていました。水俣病は特定の企業が原因、山の木を切るのは林野庁、山岳道路は建設省、干潟の埋め立ては地域の行政や不動産会社でした。しかし、1980年代に入っただけで環境問題は個人個人に原因のあることが多くなってきました。社会の仕組みそのものが複雑となり、私たちの生活そのもの

のが原因であることが多くなってきました。悪いという意識がないままに行った行為が、まわりまわってヒトに害をなす事例が多くなってきたのです。それだけに、問題解決は難しくなっています。ダイオキシンしかり、南極上空のオゾンホールしかり、我々の日常生活から出た物質が原因です。

カラス問題も同様で、誰もカラスを増やそうとしてゴミを出しているのではありません。それだけに、個人個人のマナーやルールの問題であり、社会問題であり、ことは広範囲で根深いものとなっています。そのため一自然保護団体の力だけでは解決することのできない大きな問題となっています。

今、保護団体は、対外的にはカラス問題を契機に現代の消費文明のあり方、野生生物とのつき合い方など、啓蒙のチャンスとしてとらえ真剣に取り組むべきでしょう。さらに、バードウォッチャーや研究者に対しては、身近な鳥に関心を持たせ、データの収集をはかる機会と受けとめてほしいものです。

行政の対応

おそらく、カラス問題でいちばん困っているのは行政担当者ではないでしょうか。実は行政担当者について、私は

「我々カラスや都会の野鳥を観察している者から見ると、かなり危機的な状況であると思うのですが、一般的には、まだ人が直接的に甚大な被害を被っていないとか、人命にまでいたっていないという認識があるのではないだろうか。」(松田道生・1999) などと言っていたのですが、このところいくつかの自治体とおつき合いしてみると、多くの担当者が真剣に悩み、取り組んでいることがわかってきました。前言を取り消すとともに、不愉快な思いをさせてしまった担当者の方がいらっしゃいましたらお詫び申し上げます。

住民からなんとかしてほしいと相談があれば、あるいは議員からの要請があれば、担当者は無視するわけにはいきません。さらに、市長や知事などトップダウンの命令であれば、取り組まざるを得ません。しかし、相談する住民も要請する議員、命令する長も、カラスごときもの簡単に解決できると甘く考えていることが問題なのです。石原東京都知事が「捕まえてカラスのパイでも作って東京の名物にすれば良い。」と言ったことなどはその典型です。都市という環境では銃器を使うことはできませんから、飛ぶ生き物を捕らえるというこは、たいへん困

難なことなのです。箱わなでは、かかるのは若い個体ばかり、繁殖して数を増やす成鳥はかからないのです。ですから、捕獲して減らすということができない以上、食べ物を減らし繁殖場所をなくすという選択しか今のところ考えられません。「繁殖場所をなくすイコール木を切る」というわけにはいきませんから、食べ物のごみを減らす、カラスとの接点をなくす、という根本的な対策をとらなくてはなりません。これには時間がかかります。

しかし、行政担当者の多くは2～3年で配置転換されてしまいます。現在の日本の行政システムは、カラス問題のみならず、長期にわたる問題に取り組むのには適していないのです。結局、先送りされるか単年度で効果がとりあえず出る対症療法的な施策しか実行されない傾向があるのです。

また、カラスによってごみを散らかされる、うるさい、あるいは攻撃されるといった場合、なんとかしてほしいと市民が連絡するのは行政です。相談内容によって、ごみを散らかすならば清掃関係、公園に巣を作ったということであれば公園管理、街路樹ならば土木部の道路管理、うるさいだと公害・環境関係、あるいは保健所となります。問題とその問題が起きた場所によってそれぞれの部署に回されることとなります。

このことによって、市民が相談を持ちかけた場合、運が悪いとたらい回しにされてしまいます。中には行政や生活に不満があり、カラスをきっかけに難癖をつけてくる人がいるかもしれませんが、多くは相談すれば何とかなる、あるいは切実な問題を抱えての相談です。そこでたらい回しにされることによって、カラスへの怒りが担当者へ向けられるパターンも多く、回されてきた直接の担当者が矢面に立たされることにもなりかねません。

また、担当部署がまちまちであるために、情報が拡散してしまい、現状の把握ができないという懸念もあります。たとえば、公園と道路の巣の数をそれぞれの部署で別々にカウントしたら全体の巣の数の把握はできません。

縦割りの慣例という日本の行政の弱いところを、ハシブトガラスがうまく利用して問題の解決を遅らせているように見えてしまいます。

これに対し、東京都世田谷区のような、住民相談窓口が受け付けて、そこで情報をまとめるといった動きもありますが、このような体制を取っているのはまだ一部です。

行政は法律に基づいて施策を推し進めることになります。カラスが関わるもっとも関連の深い法律は「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」です。この法律によって各都道府県は自然保護担当課の中に鳥獣保護係（東京都の場合は林務課）を設けており、ここがもっとも濃く関わる担当部署ということになります。ただし、この法律に基づいてカラス問題を解決しようとする、有害鳥獣駆除の方法の選択がまずいちばんに思いつかれてしまうことになります。その結果、カラス対策イコール駆除というパターンが蔓延する結果となります。

有害鳥獣駆除で全国で殺されているカラス類は、年間40万羽を超えています。しかし、カラスが減ったという印象はなく、どこでもカラスは増えたという報告をよく聞きます。この駆除による効果は、たいへん疑問なのです。

というのは、この法律の下に行われる有害鳥獣駆除では、効果があるかどうかの検証を行わないで良いからなのです。ふつう、対策を講じるというのであれば、現状の把握（調査）→対策の計画立案→対策の実施→効果の検証（調査）→判定という流れが必要です。この判定の結果、効果があれば継続し、効果がなければ対策の施策まで立ち返って再検討を行い、方法の変更などの調整を行います。そして再度、対策を行うなどの試行錯誤を繰り返し、目的を達成しようとするわけです。しかし、この法律の下では、そのような当たり前のことが義務づけられていません。

そのため、カラスが何羽いるかの現状の把握、そして駆除の後に効果があったかなかったのかを調べる必要はないのです。その結果、いつまでたってもカラスの問題が解決しないという悪循環に陥っているのです。

「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」は、狩猟を管理する狩猟法から出発しています。そして、昭和38年の改訂で保護という考え方が大幅に取り入れられました。それは、山階芳麿や中西悟堂といった大先輩たちが、減っていく野鳥を少しでも保護しようとして尽力された賜物であります。しかし、それから38年がたち、その間に野鳥を取り巻く世界が大きく変わりました。増えた鳥をどうするかなどといった事態は、考えられていないのです。これまた、時代遅れの法律の不備をカラスにつかれていることとなります。

東京都の施策を検証する

東京都経済局林務課では、平成12(2000)年度にカラス対策事業を実施しました。このことについて、詳しく検証してみましょう。

まず、平成12年6月12日に労働経済局と環境局の名前で出されたプレス・リリースから主な要旨を紹介しましょう。

タイトル：東京都におけるカラス対策について
—緊急捕獲実施のお知らせ—

【カラス問題の背景と実情】

東京のカラスは1970年代の大量消費時代に区部で餌となる生ゴミが豊富に入手できる等、カラスの生息に適した条件が整ったため増加が始まったといわれています。

区部のカラスの生息数は、昭和60(1980)年には約7,000羽で、平成11(1999)年には約21,000羽と推定されています。

都はゴミの食い散らかしに対処するため、これまで防鳥ネット34,000枚を配布していますが、都に寄せられた鳥に関する苦情は、平成11年度が514件で、その約6割が繁殖期の4月から6月に集中しており、おもな内容は鳴き声がうるさい、威嚇された、襲われた（頭をつつかれた、超低空飛行での接近）があります。

【都の取り組み】

庁内の9局（政策報道室、総務局、環境局、建設局、衛生局、水道局、港湾局、教育庁、労働経済局）で構成する「東京都野生動物対策連絡会」において、カラスを議題とした検討を行い、当面の目標として、都民から苦情が少なかった昭和60年代初頭の生息数（現在の1/3程度）に誘導することとし、以下に示す取り組みを確認しました。

- 1 基本的対策としては、餌となる生ゴミの絶対量を減少させ、同時にゴミの出し方を工夫する等、カラスが生ゴミを餌にできない環境をつくり、兵糧攻めによる生息羽数の減少を図る。また、都と区市町村の役割分担を明確にし、排出者の都民、事業者及びゴミ集積場の管理を担う地域住民組織等に協力体制を要請する。
- 2 補助的対策として、増加しすぎたカラスや人に危害を加えるカラスの捕獲等により羽数の減少

を図る。

- 3 「根本対策」及び「補助的対策」の実行に際し、ゴミ処理問題、野生動物との共生問題に対する都民の理解と協力を求め、広範な合意形成を図る。

[今回の労働経済局の取り組み内容・緊急捕獲]

カラスによる被害を防ぐには、ゴミの出し方を工夫するなど、ゴミ問題の解決が何よりも重要であります。

しかし、つついたり、執拗な威嚇をする等、都民に危害を加え生活に支障を与えるカラスの急増に鑑み、今回初めての試みとして「緊急捕獲」を二十三区内で実施します。都が専門業者に委託する方法で、平成12年6月15日から開始する予定です。

実施時期 平成12年6月15日

～平成12年8月14日

実施体制 専門業者（5社）への委託による

実施場所 二十三区内の民有地100ヶ所

2000年度、この事業では、100個の巣を落とすための予算として約500万円が確保されました。この年は、実施が遅れたこともあって、88個の巣落としがされたと報告を受けています。

翌年の平成13(2001)年度は、約2000万円の予算が確保され、対象地域も23区だけでなく多摩地区まで広げ対応することになりました。2001年6月現在ですので、この年の実績はまだまとめられていません。

この事業の今までにないユニークなことは、これまで有害鳥獣駆除は被害を受けた者が書類を提出して許可を得なくては実施できなかったものが、通報を受けた都が駆除を実施することで、この手間を省き、簡単に駆除ができるようになったことです。また、個人で駆除業者に依頼をすると、この申請の手間賃を含め10万円程度の費用がかかっていたものが、無料でできるというメリットがあります。

しかし、問題点も多くあります。まず、多くの都民が、東京都がカラス撲滅にいいよ乗り出し、これでうるさいカラスとおさらばできると思ってしまったことがあります。私がカラスや野鳥に関わっているのを知っている人からは、「いいよ東京都がカラスを減らしてくれるようですね。松田さんも楽になりますね。」と、声をかけられました。

このことで、東京のハシブトガラスの問題は駆除をすることで解決できるというムードができてしまいました。ちょっと考えれば、万羽単位でいるカラスをどうやって捕獲するのか、思いつくわけではないのですが、東京都がカラス撲滅作戦を実施するというイメージが先行してしまいました。これには、石原知事の「カラスのバイ」発言があったことも影響していることでしょう。多くの人は、知事が言う以上、500万円程度の予算で100個くらいの巣を落とす、零細な事業だとは思いません。というわけで、襲うカラスの巣落としが実施されていきました。さらに、この事業は、確認されているだけでも、荒川区、台東区などの区でも、区民から要請があったら区の予算で行うというように駆除事業が普及しつつあります。

そして、いちばん問題なのは、このプレス・リリースにある1と3の項目の根本的な対策がほとんど講じられないままに、巣落としのみ先行していることです。補助や緊急とうたわれた対策をし続けていることに問題があります。

この巣落としによる事業が拡大することにより、どうなるでしょう。まず、出発点であるハシブトガラスの個体数は冬のねぐらに集まる数、それも大規模ねぐらのみの数であり、東京都内の繁殖個体数ではありません。いったい、何つがいかが都内で繁殖しているのかのデータもないままに、対策を講じていることが問題です。これでは、この対策の効果が上がったかどうかの判定ができません。ひょっとしたら効果のないままに、無駄な税金を使い続ける可能性もあるのです。

次に、少なくとも東京都の言うとおりに、21,000羽のハシブトガラスがいるのならば、繁殖年齢にいたらない若者のカラスの数を差し引いても、万近い巣があるはずで、これを落とすことによって数を減らすことを考えてみましょう。500万円÷100個で、1個あたり5万円かかります。1万個の巣では、5万円×1万個で、費用は5億円を確保しなくてはならないわけです。現実問題、短い期間にこれだけの巣を落とす業者を確保することはできませんが、億単位の予算を講じなくては効果の上まらない事業なのです。

また、事業の実施は、攻撃をされたという苦情があったものに対して巣落としをするというものです。ハシブトガラスは、よく見ていると1羽1羽個性があります。人を威嚇しないで静かにそっと子育て

てをしているつがいほど、うまく雛を育てていますし、巣立つ数も多い傾向があります。ということは、巣落としされるものは結局失敗する可能性が高いのです。ですから、人為的に子育ての上手なカラスを選択し、生き残らせる結果となり、個体数の減少にはつながらないこととなります。

このほか、巣落とし効果で威嚇や攻撃がなくなるのか。さらに、カラスが繁殖をあきらめてくれるかがわからないままに事業が進められていることが問題です。

繁殖期の初期に巣を落とせばすぐに作り直しますし、遅ければ巣立ってしまいます。巣落としにはタイミングが大切なのです。さらに、巣落としをすることで、来年も巣作りをあきらめてくれるのでしょうか。私が調べている六義園では、園内の巣落としを2年連続して行いました。しかし、巣の数は減っていません。その上、巣の中の雛の数は2年目のほうが多く、巣落としの効果は今のところ見いだせません。東京都の事業では、こういった追跡調査もなされていないのです。

さらにもっとも懸念することは、「野生動物が人に害を与えたら駆除をすればよい」という風潮が蔓延することです。クマが人を襲うと、必ずハンターが出動し射殺します。クマが里に下りてきた理由、山の森林環境が変化している原因を解明、あるいは解決しないかぎりには、駆除はクマが絶滅するまで続けなくてはならないこととなります。日光のサルも、山がスギやカラマツの植林地になったことと人がむやみに餌をやったことに起因しています。それを解決しないで、駆除という安易な方策がとられる傾向を懸念するものです。

前述のように、カラスの次はカワウかと、関係者は戦々恐々としています。つい10年ほど前までは、宮城県伊豆沼のマガンもイネを食うということで、毎年、駆除するしないで論争が起きていました。世界有数のツル類の渡来地鹿児島出水市でさえも、空豆をツルが食害するという事でトラブルが続いていました。それが、少しずつではありますが、「野鳥は守るべきもの」という考え方が普及し、よい方向に向かいつつあります。そういったことが、カラスの駆除からガラガラと音を立てて崩れていく怖さがあるのです。

カラスの駆除問題を考えると、堤防から漏れる水を指一本で押さえている少年の心境になるのは私だけでしょうか。

襲うカラスの検証

カラス駆除の根拠は、カラスは人を襲うから、危険だからという理由です。自治体担当者からは、「市民住民の安全を守るのが行政の立場である。」という大義名分をよく聞かされます。また、マスコミの取材でまず聞かれるのは、「人を襲うカラスはどこで撮れますか。」です。現在、カラスは人を襲うという危険な生き物だという考え方が蔓延しています。

では、ほんとうにカラスは人を襲うのでしょうか。私自身は、2年続けてカラスの巣を50あまり調査しましたが、襲われたことはありません。カラスが体をおつけてきたことも、その結果けがをしたこともないのです。もちろん、巣に近づけば「ガアガア」鳴いて飛び回る威嚇行動はよく受けます。後ろから飛んできて頭の上をかすめるように飛んでいって風圧を感じたことが、わずか1回あった程度です。多くのカラスは、遠巻きにして見ているか、近くまでは来るものの怖くて、また逃げるという行動を繰り返しているように見えます。

ここで「襲う」と「威嚇」の定義を明確にしておかなくてはなりません。襲われたという人の話をよく聞くと、威嚇であることが多いのです。最近では、カラスは恐ろしい鳥というイメージが先行しているために、近くに来ただけでもカラスに襲われたと思う人がいるのは事実です。六義園の管理事務所では、コイに餌をやっていたらカラスに襲われたという苦情が寄せられたことがあります。話を聞くとカラスが餌をもらおうと近くにやってきたことを襲われたと思ってしまったようです。

カラスが人に負わせることのできるけがは、頭を足で蹴っての擦過傷程度です。手や足の骨を折ったという事例が報道されていますが、これはカラスの攻撃にあわてた人が転んだりして負う二次的なものなのです。

また、威嚇、あるいは襲うのは、カラスに限ったものではないということです。子供連れのクマがもっとも危険だというように、親が子供を守ろうとする行動はカラスに限ったことではありません。ハクチョウだって襲ってきます。ウトナイ湖で雛連れのコブハクチョウに威嚇されたときは、大きな鳥だけに怖い思いをしました。あとで聞いたら地元のバードウォッチャーはけがをしていました。キセキレイなどの小鳥も巣に近づくと「チーッ、チーッ」と鋭い声を上げながら頭の上を飛び回ります。この



ハチ公の上のカラスの巣

ように、親が子を守ろうとする行動は、勇気ある行動であるわけです。都会に住み野生動物と接する機会のない人にとっては、雛を守ろうとする行動がとても珍しいことになるわけです。

それから、カラスが人を威嚇、あるいは襲うことは、繁殖期に多く見られることで、攻撃してくるのはつがいの2羽であって、群れで襲うことはまずありません。

人を攻撃するカラスの行動には、それなりに理由がありそうです。これまた、攻撃を理由にしていながら行政は研究をしていませんが、事例を集めると、いくつかのパターンが見いだせます。ひとつは、雄が巣を見守っている見張り場より上に人がいったしまった場合や、巣を見下ろす場所に人がたった場合です。マンションの緑地の木に巣があり管理人が屋上で襲われる。校庭の木に巣があり、屋上に人があがる。街路樹に巣があり、横断歩道橋を人が歩く。ベランダの前に巣があるなどがこのパターンに当てはまります。

さらに、巣立った幼鳥が本来ならば木づたい、あるいは電線づたいに移動をしていくものが、下に落

ちてしまい、親鳥が半狂乱になるというのもこのパターンに近いものがあります。

いずれにしても都会のハシブトガラスが人を攻撃するにはそれなりの理由があるわけで、その理由を理解すれば避けることも可能となります。

人とカラスの関係

近世、都市空間という新たな生態系ができあがりました。カラスは、この都市生態系の中にうまく入り込んで繁栄している種と言えます。さらに、その都市に住む人々の野生動物に対する意識に特有のものが、カラスはその人々の意識の中にもたくみに入り込んで生きているとも言えます。

野生生物の多くは、狩猟の対象でした。あるいは、農作物を荒らす有害鳥獣として、じゃまな存在であったのです。「権兵衛が種まきや、カラスがほじくる。」とたとえられるように、カラスは農業を営むものにとっては害鳥以外の何ものでもありません。

ところが、都市生活者にとってカラスは食料でもないし作物を荒らされることもありません。そのた

め大方は、カラスに対して関心がありません。興味も引かず、その存在すら感じることもない生き物です。それが、今急速に身近な問題になったことにとまどっているというのが、都会に住む人の正直な感情でしょう。

ところでカラスの調査をしているいろいろな人に出会います。その話から都会で住む人の自然、そしてカラスへの感情が理解できることでしょう。いくつか紹介します。

〔無関心派〕 駒込には大和郷（やまとむらと読む）と呼ばれる、お屋敷の多い地域があります。大臣経験者も住んでいます。ここも私の調査エリアなので、よく歩きます。一軒の家の庭のヒマラヤスギにハシブトガラスの巣がありました。さほど大きな家（2階建て）でも広い庭でもないのですが、2.5階分くらいの高さの木の中、2階分ほどの高さに巣がありました。

朝でしたので若い女性が出勤のために出てきて、お母様でしょうか、お見送り。そのあと私を見て怪訝な顔をされているので、こちらから挨拶して観察している理由を言いました。というのは、下手に巣があることを言ってしまうと落とされては困りますから。しかし、この巣であれば当然、家の方であれば知っているだろうと思つての説明です。

ところが、なんと巣のあることを知らなかったのです。さほど広くない庭といたら失礼かもしれませんが、道に面しているところにある木なので、知っていると当然思つたのです。家の庭の樹木に大きな鳥、カラスの巣があることにすら気がつかない、都会人の自然に対する関心のなさを改めて知つたしだいです。

〔愛情派〕 そうかと思うと、女子高校の校庭の大きなヒマラヤスギに巣がありました。その隣のお屋敷でいつも掃除をしているおばあさんがいます。場所が場所だけに事情を話すと、そのおばあさんは「毎年、巣を作っている。」とうれしそうに話してくれました。そして、「このカラスは、私のことを慕って後をついてくる。そのため、カラスが自動車におつかってしまったことがある。」などなど、いろいろなエピソードを楽しそうに話してくれるのです。きっと、孫の自慢話もこんな感じなのでしょう。

「そのカラスは、慕ってついてくるのではなく、

警戒して後をつけているのだ。」とは、とても言える雰囲気ではありませんでした。

〔もうひとつ愛情派〕 調査中に、犬をカートに入れて散歩しているおばあさんに会いました。私がカラスを見ているのを見て、話しかけてきました。たいへんわかりにくい個人の庭のよく茂ったスタジイの中に巣があるのですが、そのおばあさんは巣があるのを知っていました。そして、お近くのマンションに住んでいるそうなのですが、カラスが巣を作りやすいように、巣材としてハンガーをたくさんベランダにおいてやっているとのことでした。片方で、カラスが巣作りをして困るといっているのに、もう片方で巣材を与える人がいる。都会におけるカラスを巡る人間模様の複雑さを知ることになりました。

〔被害派〕 不忍通り沿いに東洋文庫という国立国会図書館の付属の施設があります。この庭には、うっそうとしたスタジイやヒマラヤスギの大きな木があります。カラスにとってかっこうの巣を作りやすい環境です。このスタジイの中の巣は比較的早く見つけることができました。というのは、うるさいカラスだったからです。

あるとき、調査に行くとき巣のあったスタジイが剪定されていて、巣は跡形もありません。ちょうど職員の方が門を開けているときでしたので、カラスの巣の存在を知っているかどうか聞きました。剪定の理由は、カラスが巣を作ったからでした。巣を作らせないために木を切ったのでした。理由は、ここのカラスが以前、前を通った小学生の女の子を襲ったそうです。たまたま隣が警察署のため、被害者が警察に訴えたそうです。そのため、その職員の上司の方が菓子折を持って謝りに行ったとのこと。それ以来、図書館なので防音効果のある樹木を切るのは忍びないのだが、剪定しているとのことでした。

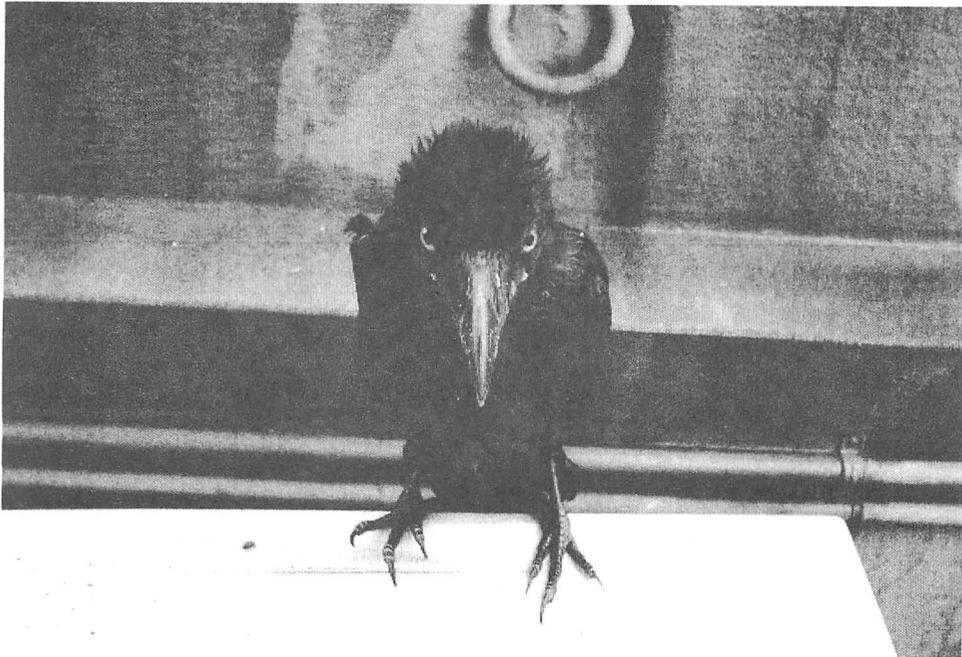
カラスが巣を作ったら、そしてそのカラスが人を襲ったら、そのカラスが巣を作った敷地の持ち主に責任があるのでしょうか。カラスに襲われた人だって、ごみを出しているわけで、カラスの増加の一助に荷担しているはずですが、その説明ができなくて、菓子折を持って謝りにいく。公立の施設ですら、カラス問題の本質を理解していないと思つたエピソードでした。

〔矛盾派〕 六義園では、カラスが多くて困っています。静かな日本庭園のたたずまいを鑑賞するために、全国、いや海外からのお客さんもたくさん来ます。ところが、一步、園内に入ると、ハシブトガラスが「カア、カア」と、うるさく鳴いています。その上、池のコイに餌をやらうとすると、すぐそばに飛んできてびっくりさせられます。そのような苦情は、帰るときに事務所の窓口に一言、言っていくわけです。ですから、私が鳥の専門家だと知って以来、所長が代わるたびに、あるいは職員から「カラスはどうにかなりませんかね。」と言われます。ところが、数年前剪定をしていたらカラスの巣がありました。巣の中には、雛が2羽。かわいそうだといいことで、この雛は皆で飼い始めてしまったのです。あれだけ、カラスに泣かされているはずなのに、目の前に雛がいるとかわいそうだといいことになって愛情を注いでしまう。これまた、現代人の心情を物語っています。

その後、この小ガラスは放し飼い状態にされ、

まったく人を恐れない個体が2羽、園内にいることになりました。お腹が減れば、餌をもらえらると思つて人のそばにやってくるハシブトガラスが2羽増えたことになってしまったのです。将来この2羽が人を恐れない故に、人家のそばで巣を作るかもしれません。その結果、人との軋轢をより顕著なものにさせるかもしれないわけです。そのような将来のことまで考えてカラスを飼ってほしいわけですが、目先のかわいさにそこまで考えが及ばないといったところでなのでしょう。

同様に、巣落としを東京都が行うということで、申し込みが殺到し、実施されています。「巣落としイコール殺す」わけなのですが、申し込んだ人が実際の作業を見て、カラスがかわいそうだというケースもあるとか。人がゴミを捨てるなどの身勝手なカラスを増やしているわけですが、さらに対策を講じようとしたときの人の身勝手もカラスを増やしているわけです。



ハシブトガラスの幼鳥

おわりに

多くの人にとってカラスの問題はたいしたことではないのかもしれませんが。たとえば、昨年、取材を受けた週刊誌の記者が、カラス除けグッズの売れ行きを調べてくれました。東急ハンズでは、カラス除けグッズコーナーができていほどだからです。そ

のグッズには、たとえば、ビニールでできたカラスの死体を模した見せしめカラス、ゴミ袋に吹き付けるカラス除けスプレーなどがあります。おもしろいことに、制作販売しているのは関西の業者なのです。やはり利に賢いというか、商売になると思つて

目をつけたのでしょう。しかし、取材をしてみると「あきまへん。」「もうかりまへん。」とのことでした。考えてみれば、このようなグッズがごみ集積場に置いてあるのを見たことは、私はありません。

私事ですが、拙著「カラス、なぜ襲う」は売れていません。朝日新聞の天声人語に取り上げられるなど、多くの新聞や雑誌で紹介されたにもかかわらず、出版して1年立ちますが初版のままです。

カラスグッズも私の本も、1,000円程度のもので、多くの人にとって、カラス問題は、1,000円程度のお金をかけてまで解決するほど深刻なものではないのでしょうか。その反面、いらなくなったCDをぶら下げればいいのか、竹に鈴をつけて驚かすといったお金のかからないアイデアの効果についてよく聞かれますし、この手の情報はよく紹介されてもいます。たとえば、ゴキブリ退治の薬品やグッズは1,000円程度ですが、薬屋の店先には山積みになって売られています。それに比べてみると、カラスはゴキブリほど嫌なものではないと思っているのかもしれませんが。しかし、何度も言いますが、カラス問題から日本の野生動物との関係が崩れていく可能性がある以上、真剣に考えなくてはならない問題なのです。

カラス問題は、東京とその周辺の問題であるとならなければ、たいへんローカルな話題です。しかし、これはこと東京周辺だけの問題ではありませんし、カラスに限ったことでもないのです。今、日本の生き物の多くが、ヒトからの影響を、直接間接を問わ

ず少なからず受けています。ヒトの作り出した環境、都市や農地、植林地を利用できるものは増えているのです。ヒトにすり寄り、ヒトと共存できる生き物だけが残っていき、ヒトとうまくやれない生き物が減少していることになります。いわば、日本列島すべてが都市化し、生き延びる鳥は都市鳥と同じ位置づけになってしまうのではないかと懸念されます。

今までの野鳥の保護は、数が減った増えたということに重点が置かれていました。これからは、野生生物が野生生物としてどれだけ自立しているかという尺度、野生をどれだけ失わないで生態系を形成しているかという判断をしなくてはなりません。こういった日本の野生生物全体がかかえる問題の中で、カラスの問題も同時に考えていかななくてはならないのです。

カラスの鳴かぬ日は、人の出すゴミがないか、ヒトそのものがない世界かもしれません。ゴミがないのは、一見理想的な社会のように思えますが、想像してみると未来世界をあつかった映画に出てくるような無機質な社会、管理された社会となるでしょう。あるいは、そこにヒトがいない可能性すらあります。どちらも怖い世界であることには変わりはありません。いずれにしても、人はカラスとともに生きていかななくてはならないでしょう。ですから、適度にカラスも生活できる自然もある都市生態系の状態と、カラスとの共存を模索しなくてはならないわけです。

【参考文献】

- 唐沢孝一、他 1995 第3回 都心に於けるカラスの集団時の個体数調査(1995) Urban Birds Vol.13
No.1 都市鳥研究会
- 川内博、遠藤秀紀 2000 カラスとネズミ 岩波書店
- 川内博、松田道生・編 1999 とうきょうのカラスをどうすべきか 第1回シンポジウム報告書 日本野鳥の会東京支部
- 川内博、松田道生・編 2000 とうきょうのカラスをどうすべきか 第2回シンポジウム報告書 日本野鳥の会東京支部
- 国松俊英 2000 カラスの大研究 PHP出版
- 柴田敏隆 1980 カラス—その生態と被害対策— 住環境の有害鳥獣対策リポート
- 東京都林務課 2000 平成12年度カラス緊急捕獲事業 出動基準等 東京都経済局林務課
- 日本野鳥の会研究センター 2001 カラスフォーラム2001・配布資料
- 松田道生 1995 六義園の野鳥 自費出版
- 松田道生 2000 カラス、なぜ襲う 河出書房新社
- 樋口広芳、森下英美子 2000 カラス、どこが悪い!? 小学館文庫
- 由井正敏、阿部禎、他 1992 鳥獣害の防ぎ方 農山漁村文化協会

もりまき通信(14)

鳥の名のつく草花たち

自然観察指導員 森 真希

●名前を知る面白さ

「あれ？この花は何だろう」と気になった植物に会う。フィールドノートに簡単なスケッチをし、写真を撮って記録する。後で図鑑をバラバラとめくり、出会った草花が紹介されているページを発見。「そうだったのかあ」と一つの生き物の名前と姿が合致した嬉しい瞬間である。

生き物の名前には様々な面白さが隠れている。余裕があれば一歩踏み込んで、和名、英名や学名などの由来を一つ一つ調べていきたいものだ。今回は鳥の名をつけられた草花(変種も含む)にスポットを当ててみようと思う。

●すすめ

殆どが草本であるが、手持ちの図鑑の中に1種類だけ「ムレスズメ」という木本を見つけた。中国原産でマメ科の落葉低木。4～6月頃、黄色の可愛い蝶のような花を咲かせるが、まだきちんとお目にかかったことがない。エニシダの親戚のような姿のこの植物、エニシダと思って見過ごしていたかもしれない。

草本ではこんな名前の草がある。

- ・オオスズメウリ
- ・オキナワスズメウリ
- ・キシウスズメノヒエ
- ・クロミノオキナワスズメウリ
- ・サンゴジュスズメウリ
- ・シマスズメノヒエ
- ・スズメウリ
- ・スズメガヤ
- ・スズメノエンドウ
- ・スズメノカタビラ
- ・スズメノチャヒキ
- ・スズメノテッポウ
- ・スズメノヒエ
- ・スズメノヤリ
- ・ホソガタスズメウリ

「スズメウリ」と「スズメノエンドウ」はその兄弟分の「カラスウリ」と「カラスノエンドウ」に対

して大きさが小さいことから名付けられたようだが、他の「スズメノ〇〇〇」もだいたい丈が50センチ以下のきゃしゃな背格好で、この雰囲気から「スズメ」の名をつけられたのか。あるいはスズメが良く食べるからなのか。どなたか「スズメノヒエを食べるスズメ」なんていう写真を撮影したことのある方はいらっしゃるだろうか？

●からす

スズメと並んで私達には身近な野鳥の一つである黒い鳥。調べてみたらこんな植物が載っていた。

- ・オオカラスウリ
- ・オオカラスノエンドウ
- ・カラスウリ
- ・カラスノエンドウ
- ・カラスノゴマ
- ・カラスビシャク
- ・カラスムギ
- ・カラスザンショウ
- ・カラスシキミ
- ・キカラスウリ
- ・ケカラスウリ
- ・マカラスムギ
- ・ムニンカラスウリ
- ・モミジカラスウリ
- ・リュウキュウカラスウリ

スズメの項でも触れたが、ウリ科カラスウリ属とスズメウリ属は、今回調べてみてこんなに仲間があることを初めて知った。

オオカラスウリやリュウキュウカラスウリ、ケカラスウリなどは九州や沖縄に分布し、ムニンカラスウリは小笠原に生息している。学生時代に何度か沖縄を訪れたことがあったのに、見落としていたのは残念。またの機会に会えることを楽しみにしよう。

自然観察会ではカラスノエンドウの質問を受けることが時々ある。春、ピンク色の花を咲かせるが、どうしてカラスと呼ぶのか。実が熟した時のサヤを採取して観察会の時に見せることが出来たら一目で納得してもらえよう。3～5センチの真っ

黒になったサヤ、これをカラスの黒い色に見立ててその名の由来となっている。

●かもめ

実は、私はカモメの名がつく植物には一種類も野外でお会いしたことがない。観察力が足りないのか、分布域をじっくり歩いたことがないからなのか。つる植物を見つけたら注意して観察しようと思う。

「カモメラン」、ラン科ハクサンチドリ属。花の姿がカモメに似ていることが由来となっているらしい。湿り気の多い森や林を好み、1～2センチの淡紅色の花を5～7月に咲かせる。北海道、本州中部以北、四国に分布。ということは私が住んでいる鳥取県内では観察できないことになる。この花を見たことのある方、カモメに似ているか是非ご感想をお聞かせ頂きたい。

ガガイモ科カモメヅル属、オオカモメヅル属。これまた種類の多いグループである。日本ではカモメヅル属は20種類以上、オオカモメヅル属は4種、確認されている。カモメの3文字が入っている名前を抜粋すると下記の通り。

- ・アオカモメヅル
- ・アズマカモメヅル
- ・オオアオカモメヅル
- ・オオカモメヅル
- ・コカモメヅル
- ・コバノカモメヅル
- ・シロバナカモメヅル
- ・ジョウシュウカモメヅル
- ・タチカモメヅル
- ・トキワカモメヅル
- ・ナンゴクカモメヅル
- ・マルバカモメヅル

空飛ぶカモメ類も種名、幼鳥、成鳥の識別が難しいところだが、花咲くカモメもそっくりさんが多いようなので、同定には識別ポイントを整理しておきたいところだ。

●ちどり

木本に「チドリノキ」というのがある。カエデ科カエデ属であるが、カエデらしくない葉を持っている。初めてその木を知ったのは東京都の高尾山、6号路だった。カエデといたら普通は手の指を広げたような掌状であるが、チドリノキは普通の葉の形

の代表である卵状の楕円形で、葉の縁には二重のギザギザ(重鋸葉)がある。大きさは長さ7～15センチほど。葉の大きな「オオバチドリノキ」というのもあり、葉の長さは20センチくらいになる。結実した実をみれば「なるほど、確かにカエデの仲間だ」と疑いが晴れる。由来は果実を千鳥の飛ぶ姿に見立てたものとか。日本固有種の一つだ。

草本はラン科のグループ。

- ・アワチドリ
- ・アオチドリ
- ・イワチドリ
- ・エゾチドリ
- ・オオキノチドリ
- ・オキナワチドリ
- ・ガッサンチドリ
- ・キノチドリ
- ・コアニチドリ
- ・シロウマチドリ
- ・テガタチドリ
- ・ナガバノキノチドリ
- ・ニイタカチドリ
- ・ノビネチドリ
- ・ニョホウチドリ
- ・ハチジョウチドリ
- ・ヒナチドリ
- ・フジチドリ
- ・ホソバノキノチドリ
- ・ミズチドリ
- ・ミヤマチドリ
- ・ヤクシマチドリ

何だか、これにシロチドリ、コチドリ、メダイチドリと並んでいても違和感が少ないリストである。こんなに沢山のチドリの花があるのに、私が写真を撮ったことのあるチドリはノビネチドリだけ。しかも開花前の状態だったので、咲き誇った姿を見られないまま現地を後にしてしまった。日本特産種であったり、局地的な分布であったり、高山にしか生息しなかったり、地味な花があれば派手な花もあったりと、それぞれの生態は十人十色。しかし、この仲間も生息域の破壊や乱獲、盗掘などで存在が危ぶまれているグループである。

●くじゃく

これはシダ植物から紹介させていただこう。「クジャクシダ」、孔雀のオスがディスプレイ用の羽を広げた姿に見立てて名付けられた。そっくりさんが多いシダの仲間でも、比較的分かりやすい種類であると思う。北海道から四国の山地によく見られる。園芸種に興味のある方は「アジアンタム」という呼び名をお聞きになったことがあるかもしれない。このシダの学名が「アジアンタム・ペダートウム」。こちらは「鳥の足の形」という意味があるとか。アジアンタムにはお仲間が多い。きっと花屋さんに行けば見られるだろう。日本の自生種としては、ホウライシダ、ハコネシダなどがある。クジャクシダの兄弟は、

- ・オキナワクジャクシダ
- ・アラゲクジャクシダ

がある。

コケの仲間にもクジャクがいた。クジャクゴケ科というグループで、日本には9種類ほど自生しているらしい。しかし、私にとってコケの世界は未知の分野。地球上に現れた順番では遥かに大先輩の生き物にも、もう少し意識を向けてみようと思う。9種のうちクジャクの名が付くのは下記の通り。

- ・クジャクゴケ
- ・シナクジャクゴケ
- ・ヒメクジャクゴケ
- ・フチナシクジャクゴケ

●ひよどり

キク科フジバカマ属とナス科ナス属にその名が見られた。フジバカマ属は、ヒヨドリが鳴く頃に開花することが由来と書かれている図鑑があったが、我が家の周りでは年中鳴いている。このグループ、各地で見たことがあるのだが、真面目に識別していなかったで、どれをどこで見たのかサッパリ分からなくなってしまった。花はいずれも桃色でそっくりさんだが、葉の状態で見分けられるので、何種類のヒヨドリに会えるか挑戦してみるのもよいかもしれない。

- ・キクバヒヨドリ
- ・サケバヒヨドリ
- ・サワヒヨドリ
- ・ハコネヒヨドリ
- ・ヒヨドリバナ
- ・ヤクシマヒヨドリ

- ・ヤマヒヨドリバナ
- ・ヨツバヒヨドリ

ナス属の「ヒヨドリジョウゴ」は虫好きでフランス文学者の大学教授、奥本大三郎さんが面白いことを書いていらしかった。漢字で「鶉上戸」、この「上戸」の使い方が引っかけるといふ。お酒を飲む席で「笑い上戸」とか「泣き上戸」という言葉はあるが、ヒヨドリジョウゴの場合にはお酒は関係がないらしい。気になって専門家に訪ねたら「上戸」の用例は「…が好きな人」という意味だとか。ヒヨドリジョウゴの場合には用法がややずれて「ヒヨドリが好きな人」ではなく「ヒヨドリが好きな実」ととれる。しかし、この実はまずいらしく、有毒性分も含んでいるともある。然るに、ヒヨドリが好んで食べると言うよりは、他の鳥が見向きもしない実を平気でヒヨドリが食べることから名が付いたと、ある本に載っていたという。昔の人の観察力をあらわしている命名と奥本さんはガッテンされたいらしい。(読売新聞2000年10月8日付け)

なるほど、これもまた「ヒヨドリジョウゴをついばむヒヨドリ」を見てみたいものである。

●つばめ

ユリ科ツバメオモト属の「ツバメオモト」。葉が同じユリ科のオモトに似ているためと言われている。ツバメは結実した濃藍色の美しい実をツバメの頭に見立てたという説がある。丈は20～30センチで、5～7月白い花を咲かせる。分布は北海道から本州は奈良県以北で、亜高山帯の針葉樹林内に生育する。ということは、またもや山陰では見られない植物らしい。またいつの日か出会えることを楽しみに、夏山登山を家族や仲間としたいものだ。

●さぎ

先の「ちどり」と並んで、殆どがラン科に属している。有名なのはただの「サギソウ」、確かに花の姿は繁殖羽をまとった鷺が翼を広げた様子にそっくりである。山野の日当たりの良い湿地を好み、夏に花を咲かせる。本州、四国、九州に分布しているが、生息環境の減少で野生の姿にお目にかかる機会の少ない植物となってしまった。東京都世田谷区の区の花に指定されているが、現在、区内での自生は確認されていないとか。学生時代、「せたがや祭り」で仲間が買ってきたサギソウの鉢植えを見せてもらったが、減りゆく花のことを想うとやはり初めての出

会いは野外の方がよかったなとも思う。そのサギソウの親戚や兄弟にはこんなものがある。

- ・オオヤマサギソウ
- ・オオバオオヤマサギソウ
- ・オオバナヤマサギソウ
- ・ダイサギソウ
- ・タカサゴサギソウ
- ・タカネサギソウ
- ・タコガタサギソウ
- ・ツレサギソウ
- ・マイサギソウ
- ・ヤマサギソウ

ゴマノハグサ科サギゴケ属にもサギがみられる。中でも「ムラサキサギゴケ」は私が草花を覚えようとしていた初期の頃に出会った思い入れが深い花である。田んぼの畔などの、湿り気のある場所で良く見られる多年生の草本で、春に2センチくらいの花を咲かせる。名の通り紫色で、苔のように丈が低く地面に広がっている。花の白い「サギゴケ」もあるが、ムラサキサギゴケと区別しない説もあるとか。他に「ヒメサギゴケ」という山地の溪流に生育するものもあるが、分布が九州南部から沖縄であるので、この花とも出会いはしばらくお預けである。

「ワタスゲ」の知名度は高いかもしれないが、「サギスゲ」のそれは低いかもしれない。共にカヤツリグサ科ワタスゲ属。ワタスゲは茎1本につき頭頂に1個の綿帽子が付くが、サギスゲは2～5個付き、形も縦長である。実の成熟期は夏。これもまだ見たことのない植物。高山をフィールドにしている方がうらやましい限りである。

●きじ

野の花から「キジムシロ」を。春に1センチくらいの黄色の花を咲かせる、バラ科キジムシロ属の多年草。株が低く丸く広がった様子を「雉が座る敷物のむしろ」に見立てたことが由来となっている。日本全土に分布しているので、あなたがお住まいの近くでも見られるかもしれない。

山の花からは「キジカクシ」。ユリ科クサスギカズラ属の多年草。山地の草原や林縁に生育する。新芽も果実も葉っぱもグリーンアスパラガスにそっくりである。沖縄を除く日本各地に分布している。山菜としても利用できるので、是非食べてみたいものである。

シダ植物から「キジノオシダ」。キジノオシダ科

プラギオギリア属。関東と新潟以南の暖地を好み、山地の林床に生育する。兄弟分に「オオキジノオ」があり、キジノオシダと生態は似ており、やや乾いた斜面を好む。南日本では普通種だとか。山陰でも探してみようと思う。

●とき

ラン科トキソウ属「トキソウ」。花の色が朱鷺の色を思わせることが由来。日当たりの良い酸性湿地に生育する多年草。5～7月に2センチくらいの花を咲かせる。兄弟には「ヤマトキソウ」があり、トキソウよりも小型で花は上向きに咲く。両方とも沖縄以外の日本各地に分布している。私はかつてこれにそっくりな花をボルネオで見たことがあるが、それが同じものなのか、あるいは同じ仲間なのかは、今となっては謎のままである。

●かも

イネ科カモガヤ属「カモガヤ」。オーチャード・グラスの別名を持つ牧草で、明治時代初期に帰化した。ヨーロッパから西アジアが原産らしいが、もうすっかり日本の野草の顔をしている。「鴨茅」の名は穂の形から付けられた英名cock's foot grassのcock(にわとり)を間違っただuck(かも)と訳してしまったことによるらしい。夏に穂が目立ってくる。ウシやウマが喜んで食べてくれるか、口元に運んで見たい草である。

「カモ」がつく植物には、他にカモジグサやカモノハシがある。しかし、カモジグサの「カモジ」は女性が髪に付け加えて結う毛のことであり、カモノハシは哺乳類の「鴨の嘴」であって、どちらも鳥の鴨そのものではない。

●ほととぎす

ユリ科ホトトギス属の仲間を紹介させていただこう。かつて、本誌60号の「もりまき通信(10)同じ名を持つ生き物たち」で「ホトトギス」を取り上げたことがある。内容が重複するが、この花の由来は花卉の斑点が鳥のホトトギスの胸の横斑に似ているところから名付けられた。

虫が好きな主人は、この花の仲間を見つけると、必ず葉っぱをチェックする。ルリタテハの幼虫がついていないか調べているのだ。ルリタテハはタテハチョウ科の蝶の仲間、日本全土に生息している。このルリタテハの幼虫は日本産タテハチョウ類で唯

一、単子葉植物のユリ科を食草とする特異な食生活をしている。主な食草はサルトリイバラで、私もこの葉を食べているトゲトゲの幼虫を見たことがあるが、まだホトトギスを食べているルリタテハは確認したことがない。庭にも良く植えられているホトトギス、もしかしたら蝶の幼虫が食事をしているかもしれない。ホトトギスのお仲間は以下の通り。

- ・キイジョウロホトトギス
- ・キバナノツキヌキホトトギス
- ・キバナノホトトギス
- ・サガミジョウロホトトギス
- ・サツマホトトギス
- ・ジョウロウホトトギス
- ・シロホトトギス
- ・スガルジョウロホトトギス
- ・セトウチホトトギス
- ・タカクマホトトギス
- ・タマガワホトトギス
- ・チャボホトトギス
- ・ハゴロモホトトギス
- ・ヤマホトトギス
- ・ヤマジノホトトギス

●やまどり

シダ植物のゼンマイ科「ヤマドリゼンマイ」。屋久島以北の日本各地に分布。湿地や河川敷、山地の尾根にも生育するとか。胞子のつく葉と、光を受けて光合成をする葉が別になっている。胞子のつく葉を胞子葉というが、この形でも見分けられるらしい。しかし、図鑑を見ただけでは、ヤマドリゼンマイには申し訳ないが、野外で見つけて見分ける自信が湧いてこない。シダやコケの先生と一緒に野山を歩いてみたいものである。

●こんなにあるとは

初めにこのテーマを思い付いた時、これほど鳥の名前が使われている植物があるとは思ってもよらなかった。

私は植物の専門家でも何でもない、生き物好きな一主婦にすぎない。そんな私が、ただ図鑑からその名を引っぱり出してきて羅列しただけなので、結果的に殆どが自分の目で見たことのない植物ばかりを、無責任に並べたリストが出来上がってしまったが、お読みになった方が、野外で花と鳥とを両方お楽しみ頂ければ嬉しい限りである。

しかし、中には不適切な表現や古い情報などが混じっているかもしれないので、そのような箇所を発見された方には是非ご教示頂きたい。

これからも、植物だけでなく、例えば海の生き物に鳥の名前が使われているシリーズや、昆虫の名前が入っている植物、獣の名前が付いているものなどを集めてみると、また違った面白さがあるかもしれないと考えている。しかし、そんな暇なことが出来るのも1才の娘が寝ているうちだけかもしれない…。

南 極 大 陸

～地球の果ての世界～

事務局 箕 輪 多津男

地球上における最も苛酷な気候を有する地域として、その一つに間違いなく数えることができるのが南極大陸であろう。北半球に位置するわが国から見れば、「地の果て」という表現もピッタリと当てはまるのではないだろうか。

南極というと、一般的には北極地域と同様、一面が雪と氷に覆われた白一色の世界という印象を強く持たれているように思われるが、しかしそこは歴とした大陸である。そのことは、全体の面積からすればわずかであるが、大地や山地の岩肌の露出しているいわゆる「露岩域」を見れば、端的に伺い知ることができる。また、イネ科の植物等も生える南極半島のような、海洋性南極と呼ばれる比較的気候の穏やかな地域においても、地面の露出している面積が広く、大陸のはじまりをはっきりと感じさせてくれる。

さて、こうした地の果てにあり、しかも極寒の地である南極大陸およびその周辺においても、様々な生物の存在が知られている。気温がマイナス60℃以下に下がり、しかも秒速50m以上になることもあるブリザードの吹き荒ぶ真冬の南極で、繁殖活動を行うエンペラーペンギンを始めとする数種のペンギンの仲間や、これらにオトウゾクカモメやオオフルマカモメ等を加えた鳥類、ウェッデルアザラシやヒョウアザラシ等に代表される海棲哺乳類、さらに、南極半島にはユスリカの仲間といった有翅昆虫等も生息している。周辺の海域は、多くの魚類の生息域になっており、オキアミ等甲殻類の数も夥しく、それにイカ類や地球上で最も大型の海棲哺乳類のグループであるクジラ類等も加わり、大変豊かな海洋生態系がそこに成り立っているわけである。

実はこれだけではない。南極にはほとんど目立たないが特異な生存を続けてきた生物もまた存在している。その一つが絶対低温細菌である。彼らは南極の氷の中に多数生息しており、0℃で順調に増殖する。逆に、気温が上昇したりすると死滅してしまう。まさに、低温の世界にだけ存在している細菌なのである。しかしながら、世界の海洋の約90%は5℃以下の世界であるので、この絶対低温細菌の分布

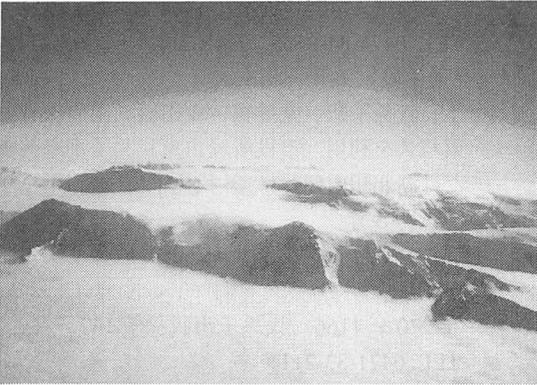
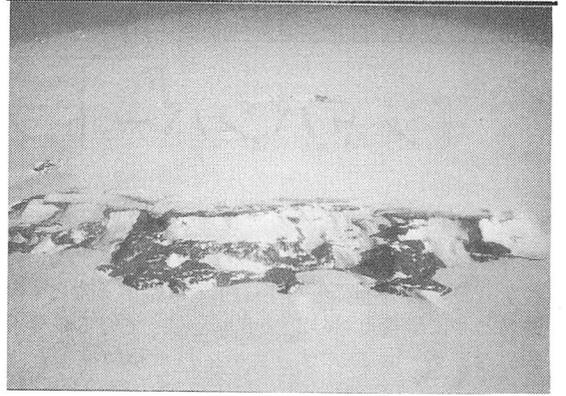
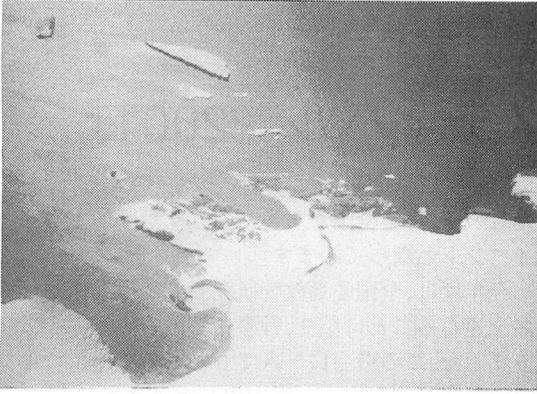
は以外に広いのではないかと推測されている。

南極における特異な生物の極め付けは、昆虫であるトビムシの仲間の存在であろう。南極における南緯68度より南の地域は大陸性南極と呼ばれ、真夏でも平均気温が0℃以上に上がることがないという、まさしく厳寒の地である。そこには、植物の中でもコケの仲間などの蘚苔類や地衣類、あるいは藻類といった隠花性のものしかもはや生息できないような厳しい環境なのであるが、そうした植物を温室として利用しながら永きに渡って命を継いできたのが、このトビムシである。現在、12種が存在しており、そのうち10種までが大陸性南極の固有種であるという。

彼らは、冬季にはマイナス70℃にも下がるこの地において、体内にグリセロールやグルコース等の不凍液を蓄積し、また先程述べたように蘚苔類等の温室の中で休眠状態をつくりだすことにより、生命を永らえることができる。温室内とは言ってもマイナス35℃近くまで下がることのあるのだが、不凍液等のおかげでからだがかたまり付くことはない。こうして長い冬をしのいだあと、ほんの短い夏の間「精子置き去り法」という交尾によらない原始的な方法により生殖活動を行う。ことにその中でも、ヒメトビムシという種は、何と4億年前からほとんど姿形が変化せずに生息し続けてきたということで、その気の遠くなるような生命のいとなみには驚愕するばかりである。

なお大陸性南極には、緩歩動物と呼ばれる低温に強いタイプのクマムシの仲間が、やはり蘚苔類等に依存しながら生息している。ちなみにクマムシとは、その姿がずんぐりしたクマに似ているところから名付けられた小動物で、体長は通常0.1～1mm程度しかなく、四対の脚を持っている。世界では既に命名されたものだけでも800種を超えているとのことである。

地球の果ての極寒の地、南極大陸。そこにも確かな生命のいとなみがあり、生態系が存在している。まさに地球が生命の星と呼ばれるゆえんであり、私たちも共に、その地球の上で生きているのである。



【参考文献】

『保全生物学のすすめ』 R.B.プリマック／小堀洋美（著）、文一総合出版、1997

『すごい虫のゆかいな戦略』 安富和男（著）、ブルーバックス・講談社、1998

後援行事のご案内

『ジャパンバードフェスティバル 2001』

(財)山階鳥類研究所の所在地であり、日本で唯一の「鳥の博物館」を有し、平成9年には「人と鳥とが共存するまちづくり指針」を策定するなど、今や鳥と共に歩むまちのシンボルとなっている我孫子市において、標記のフェスティバルが開催されます。

このフェスティバルは、日本バードカービング協会が中心となって平成10年より開催している「全日本バードカービングフェスティバル」から発展し

たもので、毎年全国から多くの方が参加する一大イベントとなっています。

今年度は、全国愛鳥教育研究会も後援団体として名を連ねることになり、行事にも協力することになりました。この機会に一人でも多くの方々にご参加いただきますよう、ご案内申し上げます。

なお、参加についての事前の申し込み等は一切必要ありません。

記

1. 主催

「ジャパンバードフェスティバル実行委員会」

《構成団体》 我孫子野鳥を守る会、こちどりの会、日本バードカービング協会、(財)山階鳥類研究所、(財)日本鳥類保護連盟、(財)日本野鳥の会、日本ワイルドライフアート協会、千葉県、我孫子市、我孫子市教育委員会、興和(株)、サントリー(株)、他

2. 後援(予定を含む)

環境省、文部科学省、日本鳥学会、全国愛鳥教育研究会、千葉県教育委員会、松戸市、野田市、柏市、流山市、鎌ヶ谷市、印西市、沼南市、関宿町、取手市、利根町、牛久市、豊岡市、出水市、米子市、豊栄市、他

3. 協賛

(株)NTTドコモ、他

4. 開催趣旨

科学的な鳥類知識の普及をはじめ、自然のシンボルである鳥たちの魅力を題材とした芸術的、文化的な事業及び教育的、環境的視点に立った事業の実施を通して、人と鳥とが共存する豊かな生活を目指していきます。合わせて、日本各地にその情報を発信し、身近な取り組みから自然環境の大切さをアピールしていきます。

5. 開催日時

11月17日(土) 9時20分～16時30分

11月18日(日) 9時20分～15時30分

6. 会場

・我孫子市市民会館

〒270-1166 我孫子市我孫子1855

TEL. 0471-84-3311

・千葉県手賀沼親水広場及び芝生広場

〒270-1146 我孫子市高野山新田193

TEL. 0474-84-0555 FAX. 0474-84-0936

《交通手段》

JR我孫子駅(常磐線・成田線)南口より阪東バスを利用 市役所経由東我孫子車庫行または湖北駅南口行にて「我孫子市役所」下車 徒歩約5分

・あびこショッピングプラザ内3F 我孫子市民プラザ

〒270-1166 我孫子市我孫子142-1

TEL. 0471-83-2111

(我孫子駅北口徒歩5分)

・その他



7. 主な内容

- * 全日本バードカービングコンクール作品展
- * ワイルドライフアートの展示
- * 鳥学講座の開催
- * アホドリ展示および鳥島での誘導作戦のビデオ映像
- * 庭に鳥を呼ぶコーナー
- * 鳥に関して活動している行政、民間団体のブースの設置
- * 手賀沼噴水前および湖上からのバードウォッチング

- * 視覚障害者向け触れられる剥製およびスキャントークの設定
- * 愛鳥ポスター入選作品の展示
- * ネイチャーゲームの実施
- * その他

8. 問合せ先

我孫子市企画調整室 担当：大畑様
 〒 270 - 1192 我孫子市我孫子 1858
 TEL. 0471-85-1111 (内線 273)
 FAX. 0471-83-0066

『列島渡り撮り』

山形則男 著 2001年6月(株)文一総合出版 定価(本体)2,200円

事務局 箕輪多津男

本書は、読売新聞日曜版に『野鳥たち』と題して3年近く連載されたものに、著者自身によって新たに書き下ろされたものを加えてまとめられた「エッセイ集+写真集」である。

本文の構成は、大きく「春夏秋冬」と季節ごとにまとめられ、1種の鳥ごとに1項目が与えられている。そのため、「野鳥図鑑」としても活用することができるようになっている。

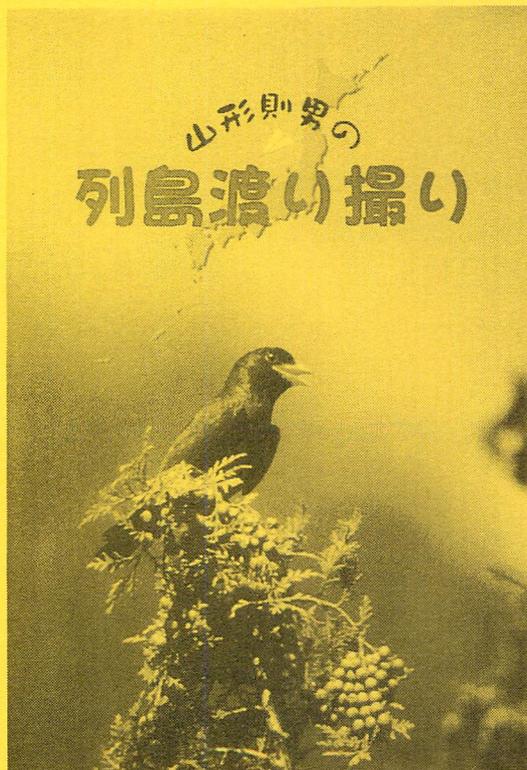
取り上げられている鳥は、ごく身近なものから大変希少なものまで含まれており、使用されている写真も、北海道から沖縄県や小笠原諸島に至るまで全国津々浦々に及んでおり、文字通り「列島渡り撮り」の趣きを呈している。また、写真一葉ごとに写真家としての著者の力量が現われている。

文章も読みやすく、また至るところにそれぞれの鳥種ごとの生態に関する記述がちりばめられているので、大変興味深く読み進めることができる。また、上記のように季節ごと鳥種ごとの構成になっているため、どこから読みはじめてもすぐに鳥の世界に浸ることができる。取り上げられている鳥種が多彩なだけに、その世界の広さと奥行きを十分に感じさせてくれる書である。

本書によって、多くの方々に野鳥の世界の素晴らしさや面白さを、改めて感じ取っていただけることを願うものである。初心者の方々にも是非ご一読をお薦めしたい。

編集後記

『カラスの社会学』の、“カラスにつつき出される私たち人間の弱み”の考察は、大変に興味深いものでした。また、カラス調査ではバードウォッチャーが当てにならないなどのご指摘は、愛鳥教育を推進する立場にある者としても、よく考えなければならぬ課題の一つだと思いました。(染谷)



愛鳥教育 No.64

平成13(2001)年8月31日

発行人 杉浦嘉雄
 発行所 全国愛鳥教育研究会
 住所 〒166-0012 東京都杉並区和田3-54-5
 第10田中ビル3F
 (財)日本鳥類保護連盟内
 電話 03-5378-5691
 FAX 03-5378-5693
 会費 3,000円
 郵便振替 00180-7-12442
 印刷所 祐文社